

地域社会との連携

浮 葉 正 親

1. これまでの経緯

留学生センターは教育交流部門を中心として長年にわたり地域社会との連携を図ってきたが、留学生センター全体が主体的に地域社会との連携を目指す取り組みを始めたのは平成13（2001）年度からである。平成14（2002）年度にはセンター内に地域連携委員会を設け、地域連携事業をセンターの活動の一つの柱として位置づけた。

その活動の中心となってきたオープンフォーラムと地域連絡会の話し合いに基づく共催事業の概要は以下の通りである。

(1) オープンフォーラム

留学生センター教員の教育・研究の成果を地域の人々に知ってもらおうと同時に、地域の声を聞くことを目的としてセンター主催のオープンフォーラムを開催してきた。

- 第1回 2002年3月 「地域日本語教育の方法を考える」
- 第2回 2002年12月 「多文化共生社会を生きる」
- 第3回 2004年3月 「ネットのリソース 地域の日本語教育」
- 第4回 2005年3月 「『留学すれば喋れるようになる』のウソとホント」
- 第5回 2005年11月 「コンピュータ日本語教材を作成しませんか」
- 第6回 2007年3月 「〈在日〉文学の時代—作家・磯貝治良氏を迎えて」

残念ながら、平成19年度はオープンフォーラムを開催できなかったが、昨年度のフォーラムの講師である磯貝治良氏が主宰する在日朝鮮人作家を読む会の結成30周年記念行事「〈在日〉文学と読む会の30年」を共催した。

(2) 地域連絡会の共催事業

平成14（2002）年に財愛知県国際交流協会、財名古屋国際センター、東海日本語ネットワークの3団体に呼びかけ、地域における日本語教育活動や異文化理解教育に関する事業について情報・意見交換のための連絡会を設けた。これまでに8回の会合を開いた。

平成14（2002）年度には地域貢献特別事業費、平成15（2003）年度、平成18（2006）年度、平成19（2007）年度には地域貢献特別支援事業個別事業費の交付を受け、連絡会での討議をもとに以下の共催事業を行った。

- 2003年3月 日本語ボランティア現職者研修会
「地域日本語教室の運営を考える～運営の方法と教え方～」
- 2004年2月 小中学校教員セミナー
「教師のための異文化理解実践—留学生とのふれあいをとおして」
- 2007年3月 小中学校教員・日本語ボランティア研修会
「日本語を母語としない子どもの日本語教育を考える」
- 2008年2月 小中学校教員・日本語ボランティア研修会
「文化間を移動する子どもたちのことばと学び」

また、平成16（2004）年度と平成17（2005）年度には留学生センターの予算で、以下の共催事業を行った。

- 2005年3月 小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会
「外国人児童・生徒をめぐる地域と学校」
- 2006年2月 日本語ボランティア研修会
「学習者の視点に立った教材の選び方」

2. 平成19（2007）年度の活動

本年度は、上記の通り、共催事業として小中学校教員・日本語ボランティア研修会を開催した。また、在日朝鮮人作家を読む会の結成30周年記念行事を共催した。これらについては別途報告する。

前年度に引き続き、(財)愛知県国際交流協会の「日本語ボランティアゼミナール（ステップアップコース）」に4回（全10回中）、3名の講師を派遣した（主催者側の事情で、19年度で終了）。また、名古屋市生涯学習推進センターと連携して、名古屋市民大学・大学連携講座（後期）に「地域の国際化と日本語教育」（全8回）を出講した。受講者によるアンケートの結果はおおむね好評であり（参加者21名中16名が「満足した」と回答）、次年度も継続する予定である。

平成19年度、豊田市から、定住外国人の日本語学習支援システムの構築（受託事業「とよた日本語学習支援システム構築委託」）を委託され、日本語使用の実態や日本語学習のニーズ等に関して、受け入れ側（地域コミュニティおよび企業関係者）と外国人双方にアンケートおよび対面調査を実施し、その調査結果を『外国籍住民の日本語学習における実態等予備調査委託調査報告書』（2008年3月、国立大学法人名古屋大学留学生センター編集発行、全97頁）にまとめた。次年度以降もこの事業を継続する予定である。

最後に、日本語ボランティアのグループ「さくらの会」と本学留学生との定期的な交流を今年度も継続した。「さくらの会」は名古屋市民大学の日本語ボランティア養成講座の修了生を中心に結成されたグループである。「日本人と日本語で話そう」というタイトルで、主にセンター所属の留学生（日本語研修生、日本語・日本文化研修生）や短期交換留学生との定期的な交流を開始した。週2回、研修コースの授業終了後、

午後3時から5時まで、センターの教室で交流が実施されている。日本語の授業とは異なるリラックスした雰囲気ので話ができるので、留学生にも好評である。社会経験豊富なボランティアの方々とのお話から日本の社会や文化について学ぶことも多い。「さくらの会」のメンバーには、日本語授業のビジネスセッションにゲストをお願いし、ホームビジットにも協力して頂いている。

なお、平成19（2007）年度は、教室での交流（学期中、週2回）を56回実施し、75名（延べ483名）の留学生が参加した。参加者の内訳は、学部生・大学院生（短期交換学生含む）37名、研究生26名、研究員4名、留学生の家族・その他が8名である。また、日本語授業のビジターセッションは22回実施され、延べ81名のボランティアの方に参加して頂いた。その他、ボランティア研修会を8回開催し、「さくらだより」というニューズレターを3回（不定期）発行している。

3. 平成20年度の計画

来年度は、(1)オープンフォーラムの開催、(2)地域連絡会の話し合いにもとづく共催事業の実施、(3)市民対象の国際理解講座への講師派遣、(4)受託事業「とよた日本語学習支援システム構築委託」、(5)日本語ボランティアと本学留学生との定期的な交流会の開催、という5つの活動を計画している。

地域社会への貢献は、留学生センター中期計画の重要な柱の一つである。日本社会が急速に多文化化していく中で、地域における日本語教育、外国人児童生徒の学校教育、日本人住民の外国人理解、異文化理解は重要な社会的課題となっている。留学生センターとしてはその人的、物的リソースを最大限に生かし、中期計画の達成に向けた取り組みを進める。